

高齢者看護学教育における認知症模擬患者を導入した演習での学び

著者名(日)	中原 順子, 佐野 望, 野田 陽子, 北川 公子
雑誌名	共立女子大学看護学雑誌
巻	1
ページ	17-24
発行年	2014-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00002982/



高齢者看護学教育における 認知症模擬患者を導入した演習での学び

The educational effects of the seminar using simulated patients
with dementia in gerontological nursing education

中原 順子 佐野 望 野田 陽子 北川 公子
Junko Nakahara Nozomi Sano Yoko Noda Kimiko Kitagawa

キーワード： 認知症高齢者、模擬患者、高齢者看護学教育

key words: elderly people with dementia, simulated patient, gerontological nursing education

要 旨

本研究の目的は、認知症高齢者の模擬患者を導入した高齢者看護学演習での学生の学びを明らかにし、今後の演習プログラム精練への示唆を得ることである。看護系短期大学に在籍する2年次生から演習終了後、「演習で学んだこと」に対する回答を得た。調査協力が得られた78名の回答を質的に分析した結果、《高齢者と接する私たちの態度》《コミュニケーションの工夫》《道具の活用・環境づくり》《回避的な対話》の4カテゴリーが抽出された。認知症高齢者と接する際の学生自身の態度や、コミュニケーションを行ううえでの具体的な技術にまで考えがおよび自分の学びとしていた。しかし一方で、認知症模擬患者の帰宅願望や不安を回避するような消極的な対応方法を学びとってしまう可能性がみられたことから、認知症高齢者がもっている本質的な不安にたちかえるといった演習の振り返りを充実させる必要性があることが示唆された。

Abstract

The purpose of this paper is to shed light on what students have learned in the nursing seminar for the elderly that uses simulated elderly dementia patients, and to gain pointers on how to refine or improve future seminar programs. After the seminar, the second year students in nursing college were asked to answer the question, "What did you learn in the seminar?" On the basis of the qualitative analysis of the responses from 78 people, I derived the following four categories: 1) "Attitudes of those who are in contact with the elderly," 2) "Communication schemes," 3) "Tool utilization and environment creation," and 4) "Evasive interaction." The categories cover the attitudes of students at the time of contact with elderly dementia patients, as well as their thinking and learning about specific techniques in communication. However, at the same time, it is possible that some students learned about dementia simulated patients, desire to return to their homes and about passive methods for avoiding anxiety. This suggests that a complete review of the seminar is necessary in order to obtain feedback from elderly dementia patients about their inner anxiety.

受付日：2013年10月25日

受理日：2014年1月28日

共立女子大学 看護学部 高齢者看護学

I. はじめに

高齢化の進行に伴い、認知症高齢者は2025年には320万人に増加することが見込まれている¹⁾。高齢者介護研究会が2003年に提示した「2015年の高齢者介護——高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて」には、認知症高齢者に対応したケアを高齢者介護の標準として位置付けていくことの方針が示されている²⁾。このような現状から、看護学基礎教育課程の中で、認知症高齢者ケアに対する教育はますます重要性を増している。

認知症高齢者ケアの教育に関する国内における先行研究では、認知症高齢者の言動には理解がたい要素を含んでいる場合が多いため、看護学生は認知症高齢者に接することにさえ困難を感じていることが指摘されている^{3,4)}。看護学生が持つこのような困難感、認知症高齢者に対する否定的な態度や高齢者差別に結びつく可能性がある。それを回避し、看護学生が認知症高齢者に対する理解を深められるようにするためには講義や演習の工夫が必要となる。そのような中、筆者らは2007年から短期大学2年次の看護学生を対象に、認知症高齢者への理解を深めること、および認知症高齢者とのコミュニケーション・トレーニングを目的に、認知症高齢者の模擬患者 (Simulated Patient: 以下認知症 SP とする) を導入した高齢者看護学演習を行い、その成果を発表してきた⁵⁻⁷⁾。まず2007年⁵⁾の報告では、帰宅願望を繰り返す場面と、水を飲むように促しても拒否する場面の2場面を設定した高齢者看護学演習について、学生からの評価によれば、この演習は価値があり貴重なもので、学習課題に関連して有用で、実践的であった。一方で、学生はコミュニケーションを行うことの難しさを感じていた。2008年⁶⁾には、帰宅欲求を示す場面を設定した高齢者看護学演習において、学生の内省的思考は認知症高齢者の帰宅への意思を尊ぶところを生成し、独自に寄り添う意味を探りあてる源になったことを報告した。2009年の報告⁷⁾では、食行動欲求への対応を設定した高齢者看護学演習において、認知症 SP との関わりに困難を示す学生は、他学生の演習や演習後の SP との交流を通して、認知症高齢者の思いを感じ取り、内省的に自己の関わりを振り返り、より良いコミュニケーション

のあり方を洞察できていた。模擬演技をすることが難しいため、われわれ以外の先行研究で認知症 SP を導入した演習を行っている報告^{8,9)}は少ないが、どのような事例やシナリオを準備するのかといった課題や⁸⁾、SP と教員間の打ち合わせ、SP に対する一定の訓練などの綿密な事前準備が重要であることが指摘されている⁹⁾。

筆者らによる現行の演習は、事例およびシナリオを変更して今年で2年目になるが、変更後の学生の演習での学びを明らかにしていない。そこで今回、演習での学びの全容を調査することで、実際の成果に基づくプログラムのさらなる精練が必要と考え、本研究に取り組んだ。

II. 研究目的

本研究の目的は、看護系短期大学2年次生に対して開講された、認知症 SP を導入した高齢者看護学演習での学生の学びを明らかにし、今後の演習プログラム精練への示唆を得ることである。

III. 用語の定義

本研究では清水¹⁰⁾の定義を参考に、模擬患者を、「患者シミュレーションの一つであり、訓練を受けたうえで患者を模擬し、シナリオに基づいて患者を演じる人」と定義する。

IV. 研究方法

1. 調査対象

調査対象はA短期大学看護学生で、2年次後期の高齢者看護学演習に参加した者114名である。

2. 調査期間

調査期間は平成25年1月であり、この期間に高齢者看護学演習とデータ収集を実施した。

3. 認知症 SP を導入した高齢者看護学演習の概要

1) 認知症 SP の特徴

今回の演習に参加した認知症 SP は、SP 養成と派遣を行なっている民間機関に所属している高齢女性8名である。このうち2名は前年度の同じ演習に参加している。あらかじめ演習の目的、シナリオや事例および演習の進め方を説明し、打ち

合わせをする機会を1回設けた。当日には役割に合う服装、履物、手提げ袋などを身に付けるように依頼した。

2) 演習の進め方

本演習に先行して、特別養護老人ホームに入所して一ヶ月を経過した、認知症の後期高齢者を紙面事例とした看護過程の展開に関する演習を、5コマ実施した。その後、同一事例を用いて、当該演習を2コマ、組み込んだ。事例およびシナリオの概要は、表1のとおりである。学生に提示した認知症SPを導入した演習の目標は、「認知症SPを通して、認知症高齢者への理解を深めるとともに、実際に関わることでコミュニケーションへのヒントを得る」である。具体的な進め方は以下のとおりである。

(1) 学生と認知症SPの編成

114名の学生を2クラスに分け、1クラス57名と認知症SP4名による演習を2回に分けて実施した。1回の演習では、学生4～5名から成る12グループを編成した。

(2) 事前準備

前週に演習のオリエンテーションを行い、グループ毎に演習計画を立案すると共に、演習の際に看護学生役を演じる学生を1～2名選出するよう提示した。

(3) 当日の進行

シナリオは、「家に帰りたい」と何度も訴え、落ち着かなくなる認知症SPに対し、家に帰ら

ない思いを聴き支援する場面とした。1回の演習で4名の認知症SPに参加してもらい、一人の認知症SPが3グループ各2名、合計6名の看護学生役に対応する運営とした。各グループの実演時間は10分程度である。

看護学生役2名は、グループで立案した演習計画に基づき認知症SPとのロールプレイを実践し、残りの学生はその場面を見学した。ロールプレイ終了後、グループごとに認知症SPと学生が演習での学びについて、20分間の意見交換を行った。そして、演習の最後に「帰宅願望があり落ち着かない認知症高齢者への援助」についてグループ討議を行い、グループ発表、全体討議を行った。演習には2名の教員がファシリテーターとして参加し、うち1名が進行役も担った。

4. 調査方法

平成24年12月の高齢者看護活動演習の授業時に、認知症SPを導入した演習に関するオリエンテーションを行った。その際に学生に調査の説明を行った。平成25年1月にA、Bクラスに分かれての認知症SPを導入した演習を2回行った。演習終了後に半構成的質問紙を学生に配布し、演習終了後1週間以内に所定の回収ボックスに提出してもらうよう指示した。半構成的質問紙は、無記名とし、基礎情報として、学生の年齢とこれまでの認知症高齢者と関わった経験についてたずね、その後、「認知症SPを導入した演習で学

表1 事例およびシナリオの概要

〔事例〕 B氏 81歳 女性。入所前までは長男夫婦と3人暮らし。長男の他に息子2人、娘1人がいるが、それぞれ家庭があり、遠方に住んでいる。幼い頃は茨城県C市に住んでいた。23歳の時に農業を営む夫と結婚し、東京都D市に住んでいる。夫と2人で農業を行っていた。6年前に夫が死亡。その頃より認知症が出現しだした。長男の嫁が主介護者であるが、勤めもあり、また心臓も悪く、外に出られたら徘徊に付き合うことは困難。長男も仕事で家にいないことが多く自宅での生活は難しくなり、一ヶ月前に特別養護老人ホームに入所の運びとなった。

〔シナリオの概要〕

(1) 入所後の様子

家の仕事や食事、夫、家までの帰り道について職員に尋ね、さらに帰宅願望がある。特に夕方になると「帰ります」「家に電話をして」と繰り返す言い、表情が硬くなり、荷物をまとめうろろして落ち着かず帰ろうとする。その際には必ず誰かに声をかけてから帰ろうとする。

(2) 場面状況

実習2日目の午後、実習終了間近になってB氏は、「家に帰ります」「家に電話をして」と繰り返す言い、表情が硬くなり、荷物を持って廊下をうろろして落ち着かなくなった。学生に家までの帰り道について尋ね、「これから家に帰ります」と声をかけて帰ろうとした。

んだこと」を箇条書きで5つまで記入させた。

5. 分析方法

半構成的質問紙に自由記述された内容を熟読したうえで、「認知症 SP を導入した演習で学んだこと」の意味が汲み取れる文章を抽出し、コード化した。そのうえで、コードの意味内容の類似性と相違性を比較検討し、サブカテゴリー、カテゴリー化した。

分析の過程で、適宜、半構成的質問紙に戻り、意味内容を適切に表現できているかを確認した。また、分析結果の妥当性を確保するために、演習の担当者2名で分析のプロセスを確認し、意見が異なる分析について話し合い、合意点を見出した。そのうえで、当該演習に関わらない看護学研究者1名のスーパーバイズを受け、表現などに修正を加えた。尚、今回は前述したように、時間的な制約から学生全員が看護学生役を体験することはできなかった。しかし、事前の演習計画の立案や、事後の認知症 SP と学生のグループ討議を通して、見学した学生も一定の臨場感を共有したと考え、質問紙を一括して分析することとした。

6. 倫理的配慮

学生には研究の趣旨、研究方法、調査内容、倫理的配慮として①研究協力への拒否の自由、②研究に協力しないことにより何ら不利益を被ることはないこと、③半構成的質問紙は無記名であること、および個人データの取り扱いと個人情報の保護、④研究結果の公表についてなどを書面で記入した本研究に関する「説明書」を、演習のオリエンテーション時に配布し、文書と口頭で説明した。研究協力をしてもよいと考えた学生のみ、半構成的質問紙を所定の回収ボックスに提出するように依頼した。

なお、本研究は共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理委員会の審査を受けて行った（承認番号、KWU-IBRA # 12034）。

V. 結果

1. 対象学生の特徴

演習に参加した114名のうち、研究協力を承諾し半構成的質問紙を提出したのは78名（回収率68.4%）であった。年齢の記載のあった76名の

平均年齢は 22.2 ± 5.5 歳、最小19歳、最高51歳だった。演習以前に認知症高齢者と関わったことがある学生は65名（83.3%）、関わったことがない学生は13名（16.7%）であった。認知症高齢者と関わった場面は、2年次の高齢者看護学領域での実習53名（61.6%）、親族26名（30.2%）、基礎看護学実習3名（3.5%）、ボランティア活動2名（2.3%）、その他2名（2.3%）であり、既習の実習での体験が多数を占めていた。

2. 対象学生が、認知症 SP を導入した高齢者看護学演習に参加して学んだこと

「演習で学んだこと」の総コード数は167であり、以下、カテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉、コードを〔 〕で表示し、カテゴリーごとに結果を記述する。「演習で学んだこと」として表2のように、《高齢者と接する私たちの態度》《コミュニケーションの工夫》《道具の活用・環境づくり》《回避的な対話》の4カテゴリーが抽出された。

1) 高齢者と接する私たちの態度

学生は、認知症 SP を導入した演習を通して、《高齢者と接する私たちの態度》を顧みて学びとっていた。それは、〔相手の背景を知る必要がある〕などの相手に〈関心を持つ〉とともに〔相手の言うことを否定しない〕という〈否定せず肯定的に接する〉ことや、相手の言うことを〈傾聴すること〉、〔相手の言葉を受け入れ〕て〈共感・受容すること〉、相手の〈考え・気持ちを尊重すること〉、〔本気の言葉で接する〕などの〈真摯に敬意をもって接する〉といった認知症 SP と接する際に望まれる態度が具体的に記述されていた。加えて、〔相手を落ち着かせるより自分の冷静さを欠かないようにする〕など、態度のとり方に影響を及ぼす〈自分をコントロールする〉心の持ちようや、〔嘘はつかない〕など〈信頼を得る〉ための基本的態度についても着目していた。

2) コミュニケーションの工夫

認知症高齢者とのコミュニケーションを円滑に行うための、《コミュニケーションの工夫》についても学生は学びを得ていた。それは、〔臨機応変に対応することが大切〕などの〈コミュニケーションの基礎力を付ける〉ことであり、そのためには相手の〔興味・関心のある話題を提供する〕

表 2 認知症 SP を導入した演習の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
高齢者と接する私たちの態度	傾聴する	傾聴の気持ちを忘れずに接することが大切
		傾聴することで本人の安心感につながる
		相手の思いを傾聴する
		根気強く接する
		自分がきちんと話を聞いてあげたいという心構えで接する
	共感・受容する	相手の言葉を受け入れる
		気持ちを受け止めることが大切
		共感することを実行することは難しい
		共感することの大切さ
		受容することの大切さ
	考え・気持ちを尊重する	こちらの考えを押し付けるのではなく気持ちに寄り添うことが大切
		相手の気持ちを尊重する
		相手の考えていることをわかろうとすることが大切
		相手の立場に立つことが難しいが大切である
	関心を持つ	「あなたに関心がありますよ」という態度を示す
		相手を知ろうとする姿勢が大切
		一人の人間として対等な立場であることを忘れない
		相手の背景が現在の行動に反映されている
		相手の背景を知る必要がある
相手の性格を考えて関わる		
真摯に敬意をもって接する	熱心に真摯に対応すると伝わる	
	敬意を持って接する	
	薄い言葉ではなく本気の言葉で接する	
信頼を得る	信用して貰うことが大切	
	嘘はつかない様にして信頼を得る	
否定せず肯定的に接する	肯定的に接する	
	教えて貰うという姿勢で接する	
	無理強いをしない	
	ほめたり頼ったりするなど自信につなげる	
	相手の言うことを否定しない	
	自分をコントロールする	
コミュニケーションの工夫	逆行年齢に合わせる	相手の時間軸に合わせた対応をする
		相手の認識している時代に一緒に戻る
		相手の今の時間を共にする
		相手の世界に寄り添って話を進める
	表情を読み取る	仕草にも相手の気持ちが現れていることを忘れない
		表情を読み取ることが大切
		目が泳いでいるなどの違いで感情を判断する
	コミュニケーションの基礎力を付ける	目や表情を見て話す
		その人をよく観察する
		会話力の大切さ
		洞察力を付ける
	伝わる言語メッセージを用いる	臨機応変に対応することが大切
		話すスピードはゆっくりで声は大きくはっきり話す
		ゆっくりやさしい口調で話す
	非言語メッセージを活用する	言葉の選び方を考える
		視線を合わせて会話する
		笑顔で接することが大切
	話題の引き出しをつくる	ボディタッチは関係を築いてから行う
		様々な引き出しを自分が持っていることが大切
興味・関心のある話題を提供する		
好きなこと、得意なことについて話をする		
相手の好きなこと、得意なものを与え安心させる		
服のことや持ち物など身近な会話を探す		
道具の活用・環境づくり	手がかりを用いる	時計などの物を用いて説明するとよい
		カレンダーや時計などを使うことで理解がしやすくなる
	安心を引き出す	椅子に座ってもらい落ち着いてもらう
回避的な対話	不安に落ち込ませない	相手が安らぐ場を作る
		夫や家族を思い出すなど帰宅願望を助長させる会話を避ける
		帰宅願望から気持ちをそらすことが大切
		相手の興味のある話をして話題をそらす
		話題を变えることが重要
	外出するという気持ちになるので帽子をとってもらおう	
	落ち着いてもらうために必要なことを考える	
不安を避けて通る	会話を途切れないようにする	
	待たせることは不安や焦りを増強させる	

などの〈話題の引き出しをつくる〉ことや、〔相手の認識している時代に一緒に戻る〕〔相手の世界に寄り添って話を進める〕などの〈逆行年齢に合わせる〉必要性を学んでいた。また、コミュニケーションは、〔話すスピードはゆっくりで声は大きくはっきり話す〕などの〈伝わる言語メッセージを用いる〉ことだけでなく、相手の〈表情を読み取る〉ことや〔笑顔で接することが大切〕〔ボディタッチは関係を築いてから行う〕などの〈非言語メッセージを活用する〉ことで成り立つことも学んでいた。

3) 道具の活用・環境づくり

認知症 SP との言語的、非言語的コミュニケーションに加えて、〔カレンダーや時計などを使うことで理解がしやすくなる〕などの〈手がかりを用いる〉ことや、〔相手が安らぐ場を作る〕ことで〈安心を引き出す〉ための《道具の活用・環境づくり》も学びとして記述されていた。

4) 回避的な対話

認知症 SP の強い帰宅願望に対して、《回避的な対話》をとることも学びの中にみられた。それは、帰宅願望が生じている認知症 SP に対して、話題を変えたり、帰宅願望から気持ちをそらすことで〈不安に落ち込ませない〉ようにしたり、〔会話を途切れないようにする〕などの〈不安を避けて通る〉ことであった。避ける、そらすといった認知症高齢者の不安を受け止めることから消極的な記述も複数みられた。

VII. 考 察

1. 認知症 SP を導入した高齢者看護学演習の学びの特徴

この認知症 SP を導入した演習の特徴の一つは、看護学生役として学生もロールプレイに参加する点にある。したがって、認知症 SP のリアリティと同時に、困惑したり、行き詰ったりしてしまう看護学生役の姿も、見学者である他の学生には自分の出来事のように感じられたと考えられる。そのような臨場感から、学生は、〔相手を落ち着かせるより自分の冷静さを欠かないようにする〕などの〈自分をコントロールする〉ことの必要性を学んでいたが、それ以外にも今回の学びとして《高齢者と接する私たちの態度》が挙げられたものとする。通常の講義では、認知症の症状や援

助方法を知識として提供することはできるが、自分の身に置き換えて、自身の行動をイメージするまでには至らない。しかし、実際に近い認知症 SP と看護学生役の学生とのロールプレイを見ることで、自分自身のコミュニケーションの際の対応を振り返る機会となったものとする。このことから、認知症 SP を導入した高齢者看護学演習では、鈴木¹¹⁾ が述べるように、学生同士のロールプレイにはないリアリティや緊張感をもった学習環境を提供できることが分かった。

塚本⁶⁾ が述べるように、今回の認知症 SP を導入した演習において、学生は躊躇・戸惑い・困惑など、関わりに抵抗を感じつつ、帰宅されたら大変という思いから一方的に帰宅行動を制止する対応をとる傾向にあった。帰宅行動を制止するのではなく、帰宅願望に執着している認知症 SP の気持ちや感情を理解し、他に向けるための努力をすることが重要となるが、その場合、相手の気持ち、感情に沿わない形で行うと無理やり気分転換をさせられていると感じ非効果的である¹²⁾。相手の思いを〈傾聴し〉、相手の気持ちや感情を〈共感・受容〉しつつ、〔相手の世界に寄り添って話を進める〕などの〈逆行年齢に合わせる〉ことや、〔興味・関心のある話題を提供する〕などの〈話題の引き出しをつくる〉努力をすることは必要なことである。そのためにも、これまでの相手の生活史や生活習慣、好み、職業などの〔相手の背景を知る必要がある〕などの相手への〈関心を持つ〉ことが、きっかけや手がかりになるものとする。

認知症 SP を理解するためのコミュニケーションのあり方については、〈伝わる言語メッセージを用いる〉ことだけでなく、相手の〈表情を読み取る〉ことや〔笑顔で接することが大切〕〔ボディタッチは関係を築いてから行う〕などの〈非言語メッセージを活用する〉など、《コミュニケーションの工夫》をどうするかといった具体的な技術を学ぶことができていた。また、〔カレンダーや時計などを使うことで理解がしやすくなる〕という〈手がかりを用いる〉ことや、〔相手が安らぐ場を作る〕ことで〈安心を引き出す〉ための《道具の活用・環境づくり》という面にも視野を広げて対応を考え始めている様子が伺えた。

しかし、認知症高齢者との交流の経験が極めて限られているせいか、認知症 SP の不安を受け止

め、それに耐えることに対するこだわりよりも、認知症 SP を〈不安に落ち込ませない〉ようにすることや、〈不安を避けて通る〉などの《回避的な対話》を学びとしていた点に、疑似場面であることの限界がある可能性が示唆された。

2. 認知症 SP を導入した演習展開に対する示唆

1) シナリオの内容と認知症 SP との事前準備

事例およびシナリオの概要を表1のように設定したが、実習終了間近という時間を具体的に明記しない状況設定にしたため、学生は認知症 SP とのロールプレイで曖昧な返答をすることがあった。また、B氏は、「家に帰ります」「家に電話をして」と繰り返し言うという状況設定にしたが、「家に電話をして」と認知症 SP がしきりと訴えるために、看護学生役の学生が自分で電話をかける演技をするという、シナリオ作成時には想定しなかった演技内容もみられた。しかし、状況設定を詳細にしすぎると、逆に臨場感やリアリティが低下する可能性が高い。むしろ、ハプニングが起こる可能性を想定しつつ、その場で発揮される認知症 SP と看護学生役の学生とのダイナミクスを信頼し、演習後の学びの共有場面をリードする教員のパフォーマンス力の向上が求められると言える。

認知症 SP を導入した演習の効果をあげるためには、そういったハプニングの可能性も含めて、認知症 SP との事前の綿密な準備が必要となる。本研究で用いた事例およびシナリオで演習を行なって2年目になる。1年目は養成機関に研究者が行き、事前打ち合わせを行った。2年目となり認知症 SP の入れ替わりもあったが、事例、シナリオ、演習を行ううえでの留意点などを記述した資料を送ることで、演習は特に問題もなく順調に行うことができた。

2) 学生の事前学習と事後の振り返りの必要性

今回の演習では、認知症 SP 数や時間的な制約から看護学生役を体験できた学生は2日間の演習で48名だった。本研究では、看護学生役とそうでない学生との半構成的質問紙を区別して結果を分析していない。中山ら¹³⁾は、看護師役をしなくても役割を通して演習に参加し、意見交換での学びを共有することや、第三者の視点で会話を聞くことで自分の良い点、改善点が明確になるな

ど、看護師役をした学生と観察者では学びに有意差がなかったと報告している。本研究でも観察者にも一定の学習効果を保証するために、グループで演習計画を立案し全員が事前準備を行い参加する、認知症 SP を含めた全体で討議して学びの共有化を図るなど、看護学生役体験の有無による学びの差を埋めるための学習を行ったが、その学習の効果の相違については明らかにすることはできなかったため、今後の課題としたい。また、実体験からの学びの有用性が指摘されている⁹⁾ことも踏まえ、今後は全員が看護学生役を体験できるようにすることも検討したいと考える。

一方、学生が認知症 SP の帰宅願望を十分に受け止める前に、やり過ぎてしまおうという消極的な対応方法を学びとしてしまう可能性がみられた。演習には2名の教員がファシリテーターとして参加したが、4つのグループが一斉に演習や話し合いを行う体制では、教員が細やかな点の確認や助言ができていく状況にある。演習の最後に「帰宅願望があり落ち着かない認知症高齢者への援助」についてグループ討議を行い、グループ発表、全体討議を行ったが、「帰宅願望」というインパクトのある状況設定であるからこそなお、その場限りの問題解決にならないように、認知症高齢者がもっている本質的な不安にたちかえるといった演習の振り返りができるようにする必要があると考える。

3. 本研究の限界と今後の課題

認知症 SP 導入の演習後に SP を交えての意見交換やグループ討議、全体討議を行い、学びを共有したあとに半構成的質問紙に記入してもらったため、全体の意見を、自分の意見として書くなどの影響があった可能性がある。また看護学生役とそうでない学生との質問紙を区別して結果を分析していないため、看護学生役体験の有無による学びの相違を明らかにすることができなかったことは、今後の課題である。今後は、今回の演習成果が、実際の実習場面で効果としてあらわれるのかといった波及効果や、シナリオと学習成果の関連性などについても検討を加え、よりよい演習教育の開発を進めていきたい。

VIII. 結 論

認知症高齢者とのコミュニケーション・トレーニングを意図した、認知症SPを導入した高齢者看護学演習での学生の学びを明らかにし、今後の演習プログラム精錬への示唆を得ることを目的に、看護系短期大学に在籍する2年次生に対して半構成的質問紙調査を行い、協力が得られた78名の回答を質的に分析した結果、以下のことが分かった。

「演習で学んだこと」として《高齢者と接する私たちの態度》《コミュニケーションの工夫》《道具の活用・環境づくり》《回避的な対話》の4カテゴリーが抽出された。学生は認知症高齢者と接する際の学生自身の態度や、コミュニケーションを行ううえでの具体的な技術にまで考えがおよび自分の学びとしていた。しかし一方で、認知症SPの帰宅願望や不安を回避するような消極的な対応方法を学びとしてしまう可能性がみられたことから、認知症高齢者がもっている本質的な不安にたちかえるといった演習の振り返りを充実させる必要があることが示唆された。

引用文献

- 1) 厚生統計協会：国民の福祉の動向2009, p.119, 2009.
- 2) 高齢者介護研究会：2015年の高齢者介護——高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて——, 2003.
- 3) 堀口由美子：痴呆性老人に接する時に感じる困難の処理のされ方——老人看護実習指導方法の向上をねらいとして——, 老年看護学, 4 (1), 88-97, 1999.
- 4) 宮本美佐, 伊藤まゆみ, 小泉美佐子：看護学生が痴呆高齢者への対応で困難を感じる状況の分析, 群馬保健学紀要, 22, 47-54, 2001.
- 5) 三澤久恵, 中澤明美, 佐野望：模擬患者参加による認知症高齢者演習の学習効果——学生の受け止めの分析から——, 共立女子短期大学看護学科紀要, 第2号, 69-80, 2007.
- 6) 塚本都子, 三澤久恵, 中澤明美, 他：認知症高齢者の意思を尊重した看護学性の共感プロセス——模擬患者 (Simulated Patient) 参加型演習の分析から——, 日本看護学会論文集, 第39回老年看護, 279-281, 2008.
- 7) 塚本都子：認知症高齢模擬患者の参加型演習における教育効果——コミュニケーションに焦点をあてた分析から——, 日本看護学会論文集, 第40回老年看護, 147-149, 2009.
- 8) 国武和子, 古川秀俊, 野口房子：模擬患者を利用した老年性痴呆患者の看護における学生の反応と学習過程, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, 2, 23-34, 2001.
- 9) 本田多美枝, 上村朋子：看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察——教育の特徴および効果, 課題に着目して——, 日本赤十字九州国際看護大学紀要, 第7号, 67-77, 2009.
- 10) 清水裕子, 横井郁子, 豊田省子, 他：看護教育における模擬患者 (SP; Simulated Patient・Standardized Patient) に関する研究の特徴, 日保学誌, 10 (4), 215-223, 2008.
- 11) 鈴木玲子, 高橋博美, 藤田智恵子, 他：成人看護学における対象理解を深める教育方法の検討 [1]——SPを取り入れたコミュニケーション授業の導入と展開——, 看護展望, 28 (3), 334-340, 2003.
- 12) 六角僚子：認知症ケアの考え方と技術, 医学書院, 2010.
- 13) 中山亜弓, 杉本幸枝, 土井英子：模擬患者 (SP) を活用したコミュニケーション演習の学びの分析——基礎看護学実習後の振り返りを通して——, 看護・保健科学研究誌, 8 (1), p.144, 2008.